



コスタリカ国草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 12

2016.7.20

## ～セバディージャ村～

NPO 法人イフパット 研究員 小林沙羅  
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

プロジェクトではサンタリタ村の他にセバディージャ村も対象として、活動しています。サンタリタ村より2カ月遅れワークショップを開始し、現在まで5回のワークショップを実施しています。毎回12名前後の参加があり、こちらは女性だけでなく男女混合、家族全員で参加している住民もいます。サンタリタ村に比べると組織経験が少なく、人柄もとてもおとなしいです。サンタリタ村では大爆笑、大盛り上がりのアイスブレイクなどもセバディージャのメンバーは淡々とこなします。最初は人前で話すことが恥ずかしい、メンバーのうち一人だけですが読み書きが出来ないから…と後ろに下がっている、グループワークをしてもファシリテーターに発表代理を頼むなど、参加も限られていました。5回目のワークショップを迎えようやく、積極的な発言も増え、グループとしての意識が芽生えてきたようです。

セバディージャ村もサンタリタ村と同じように、入植地ですが住民は専業農家ではなく町での日雇い労働などに収入を頼っています。



ただ、各家庭の敷地がより広く、家庭訪問をしていても敷地内で畑や果樹、養鶏を実践している家庭がほとんどで農業の経験があります。オロティナ市中心部から車で20分とは信じられないほどの、果樹の森が広がる敷地を持っている住民もいます。それぞれの得意なことについて話し合った時も、農作業を挙げている住民が何人かいました。また第一回目のワークショップで日本の生活改善経験を話した時から、彼らの口からよく言われるのがグループとして活動することへの関心です。生活の中の何を改善したいか？を話し合った際も「グループの連帯 (unión de grupo) を高めたい」という声がありました。セバディージャ村ではグループの連帯の他に、「良い家族生活(bienestar familiar)」、「住居改善(vivienda)と「健康 (salud)」が活動テーマとなっています。

「私の一日」の手法を使いワークショップをした際にも、大人しいグループゆえに一日を振り返って「何を変えたいか？何を改善する必要があるか？」とファシリテーターが問いかけても「特に問題はない」、「今の生活で良い」といった反応でした。次のワークショップになってようやく一人の女性がファシリテーターに話しかけ始めました。彼女は朝3時半に起床し、子ども達を学校と仕事に送り出し日中は家事に追われるという一日を過ごしており、自分の一日は家族のためにあるので、それで良いと言い切っていました。ワークショップで自分の時間や休息时间を持つ、十分な睡眠や運動について話し合ったことをきっかけに、ずっと考えていたようです。今の生活はこれで良いのか？と分析を続け自分の生活を見直そうとしていると話してくれました。



また興味深かったのは、今後実施する活動について話し合った際に家族が豊かであるために、自給用の作物を育てる活動が挙げられたことでした。農業をすることが生産活動としてではなく、家族での食事、時間が豊かになるための活動として位置づけられていたのです。また健康のために野菜や果物を消費する活動は当初お金がかかる活動に分類されましたが、自分達で作ればよい、という発想に変わってきています。水の節約をするという活動では、節約したお金でアイスクリームを買う(ちょっとしたお金が出来て嬉しいことの比喩だそうです)、子ども達からはおもちゃを片付ける、などの活動も挙がっています。初期のワークショップで村の地図を描いた際は、村の一部にごみ収集車が入らずゴミが溜まっている問題が挙げられたままでしたが、活動を話し合う中でワークショップ参加者が「生活改善グループ」としてゴミ収集に行ったらどうか、という意見が出ています。家庭レベルでもグループ・レベルでもお金がかからない、すぐに出来そうな活動がたくさん挙がりました。